

竹カバンブー・ラボ 徳島県小松島市・勝浦町

LEDの光が優しく灯る 竹灯籠が町の風物詩に

東京のウェブ制作会社を退職し、徳島県にイターン。そんな秋山諒太さんがひよんなことから携わるようになったのが「竹灯籠」作りだった。竹と明かりの温もりで地域の活性化を目指す。



阿波おどり会場でもある「アスティとくしま」で展示した竹灯籠。多くの来場者から感嘆の声が上がった。

暗闇の中、竹灯籠の内部に仕込まれたLEDライトが点灯すると、なんともいぬ幻想的な景色が現れる。真っ暗な闇夜より、月明かりがある方が竹の輪郭がくっきりと見えて灯籠の美しさも際立つ。

この竹灯籠を作っているのは、徳島県勝浦町地域おこし協力隊の秋山諒太さんと、小松島市地域おこし協力隊の前淵智晴さん。きっかけは前淵さんが小松島市内にある放置竹林を活用して何かできないかと考えていたこと。竹の根は広く侵出し、周囲の樹木の健全な成長を阻害するため、放置竹林は深刻な問題なのだ。

そんな折、地域の住民から「竹で灯籠を作るのはどうか」というアイデアをもらう。

「これだ」と思い、同じ地域おこし協力隊仲間とデザイン



「バンブー・ラボ」発起人の前淵さん(右)とデザイン担当の秋山さん(左)。

ナーの秋山さんに声をかけて2016年(平成28)5月に「バンブー・ラボ」を立ち上げました(前淵さん)

彼らが作る竹灯籠はすぐに話題になり、「イベントや祭りなどで展示してもらえないか」と声がかかるように。これまで半年間に、徳島市の秋の阿波おどり、小松島市の立江八幡神社秋



2016年11月に行われた「軽トラ市」では、初めての販売用商品となる卓上用竹ランプをお披露目。

季例大祭など、10件以上の催し会場をいくつもの竹灯籠の明かりで彩った。

秋山さんは、祭りやイベントのコンセプトに沿ったデザインを心がけている。これを汲み取るのが最も難しいという。そんな竹灯籠の評判は口コミやSNSなどで全国に広まり、最近ではわざわざ遠方から見に来る人も増えたそうだ。

「この活動を始めて思ったのは、竹灯籠を通じて地域の人たちがつながるのが一番嬉しいということ。そのつながりが、また新たなつながりを生むため、次々といたたく展示依頼に僕たちの制作が追いつかない状態です(笑)(秋山さん)」

じつは秋山さん、神奈川県生まれ。勝浦町へは2014年にイターンで移住してきた。

「もともと、渋谷のウェブ制作会社で働いていましたが、アウトドア好きが高じて田舎暮らしに憧れ、たまたま総務省が過疎対策として行っている『地域おこし協力隊』の制度を知り、こちらに引っ越してきました(秋山さん)」

秋山さんにとって竹灯籠は地域に溶け込むためのツールでもあるのだ。竹の伐採や灯籠の制作は地域の住民も積極的に手



小松島市の櫛淵八幡神社の秋祭りでは、石段を賑かにライトアップ。



卓上用竹ランプは購入可能。

伝ってくれる。住民の中には竹に関する知識が豊富な人や、電子工作が得意な人などもあるため、大きな支えとなっている。購入希望の声が増えたため、高さ16cm程度の卓上用竹ランプの販売も始めた。箱入り、アダプター付きで3000円。この竹ランプをきっかけに竹林整備の必要性や竹の可能性について多くの人々に知ってもらおうのが目的だ。

「竹の工芸品や日用品作りを昔のような『文化』に戻したい。最終的には『自分たち』でできるから、バンブー・ラボなんて必要ないよ」と言ってもらえたらうれしいですね」

秋山さんは、そう言いながら笑った。

(石原たまき)